

第17回 土佐の皿鉢ゼミ開催

教職実践高度化専攻（教職大学院）の院生による実践研究発表「第17回土佐の皿鉢ゼミ」が、2026年8月18日（火）に開催されました。今回も、対面とWeb会議システムZoomを用いたオンラインによるハイブリッド方式で行われ、91名の方々にご参加いただきました。

開会行事では、野村幸代専攻長から、皿鉢ゼミの特徴を踏まえ、「異なる立場の人々が『問い』を持ち寄り、対話によって研究と実践をつなぎながら、教育の未来を共に創っていく」という趣旨の挨拶がありました。その後、高知県教育委員会の今城純子教育長と院生3名による対談が行われました。

対談では、「理想の学校」をテーマに、子どもも教師も安心して過ごし、学びや仕事にやりがいを感じられる学校の在り方について意見が交わされました。子どもが興味・関心をもとに夢中になって学ぶ「学びに沼る学校」という表現も提起され、失敗を成長の過程として受け止め、安心して挑戦できる環境づくりの重要性が確認されました。また、多様性を認め、一人ひとりを大切にするとともに、教師自身も学び、語り合い、支え合える職員室づくりの必要性も示されました。さらに、こうした学校の実現には、学校・教育委員会・大学がそれぞれの知恵を持ち寄り、協働して教育を創っていくことが重要であることが確認されました。

対談のまとめでは、柳林信彦副専攻長から、子どもだけでなく教師や学校組織においても、「安心→挑戦→失敗→学び→再挑戦」という循環をつくることの重要性が示されました。また、学校改善には、明確なビジョンやリーダーシップ、教員の協働などが重要であり、学校の挑戦を認め、その取組を支え広げていくことが教育委員会の役割であるとまとめられました。

本紙では、教育長との対談に続いて各会場で行われた院生の実践研究発表について、それぞれの研究の成果や今後の課題、各コースのテーマ別協議で交わされた議論の様子をご紹介します。



【学校マネジメントコース】

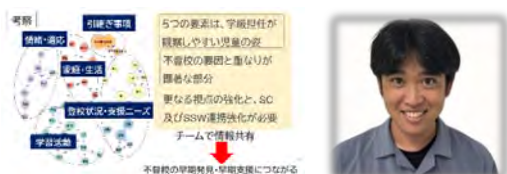
M2 石原萌さん 学校業務改善による教育の質の向上へのアプローチ

本研究の目的は、業務改善を通して教育の質向上に繋げることです。教科や校務分掌の情報について、属人化や業務の重複が起きない組織体制を目指し、ICTを活用し「探せる・共有できる・引き継げる」仕組みを構築し、試行を行いました。これらを通して教職員間の協働性のさらなる向上に繋がりたいです。



M2 久保田慎さん 不登校予防につながるチーム支援の在り方について

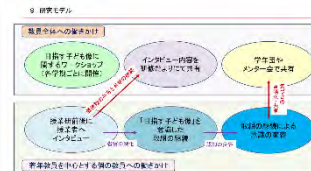
—共通の観察視点を生かした情報共有シートの開発とOODAループを活用したケース会の改善に向けて—



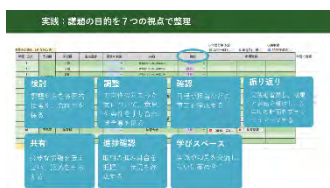
教員が「気になる児童」と判断した理由を分析し、児童理解に用いている観察視点を明らかにしました。その結果、児童理解に関する5つの観察視点が抽出されました。今後は、これらの観点を基に不登校予防のための情報共有シートを開発し、OODAループを活用したケース会の改善につなげていきます。

M2 小林絵里子さん 同僚性を高める校内研修の在り方

実習校の校内研修の現状と課題を踏まえ、その改善を通して組織力向上に資する校内研修の機能と意義を明らかにすることを目的として研究を進めています。今後は、ワークショップや授業研前後のインタビュー等を行い、こうした取組の循環が組織力形成にどう寄与するか検討していく予定です。



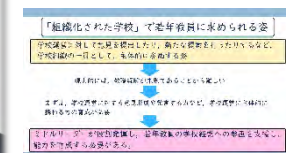
M2 西岡佳也さん よりよい学校組織形成のための学年会運営について



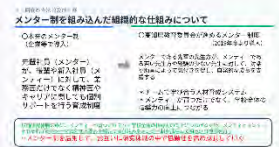
本研究の目的は、伝達・コミュニケーション・調整の場である「学年会」に着目し、その役割の明確化と、その役割を遂行するための校内環境や組織の在り方を検討することです。具体的に「学年会」を組織的に運営する仕組みを構築し機能させることで、学校教育目標の実現につなげる取組を進めています。

M1 岡林功祐さん 若年教員の主体性の向上を促すミドルリーダーの役割

本研究の目的は、学校を組織化するための若年教員の学校運営参画を支援するミドルリーダーの役割とその方途を解明することです。会議の参与観察やインタビュー調査を行い、実態把握と課題整理を進めてきました。今後は課題に対する具体的な方策を検討し、実践につなげていく予定です。



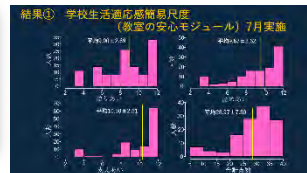
M1 堀地麻美さん 教員の協働性を高める組織運営の在り方 ―共に高め合うメンター制を通して―



本研究の目的は、県内の学校で若手教員の増加や孤立が懸念される中、メンター制を活用して教員間の協働性を高める組織運営の仕組みを解明することです。今後、実態把握を進めながら、校内研究体制にメンター制を組み込み、互いの弱みを補完し合うことで協働性を高め成長していく教員組織を目指します。

M1 水田諒さん 不登校・居場所づくり・仲間づくり ―統合校における心理的安全性を高める取組とその効果検証―

本研究の目的は、統合校において学級の心理的安全性を高める介入とその効果検証を行うことです。教員へのインタビューや生徒アンケート、生徒観察から在籍校における心理的安全性の現状把握を行っています。今後は心理的安全性を高める介入の実施やアンケート等による効果検証を行う予定です。



M1 吉村江梨さん スクールミッションの実現に向けた学校組織の在り方 ―教育活動の成果を発信するための学校組織の構築―

地域の拠点校における魅力発信モデル



地域の拠点校として選ばれる学校を目指し、実習校の生徒・教職員への調査を通して、学校の魅力と発信の課題を明らかにしていきます。さらに、今後は地域の中学校への調査も行い、地域の期待と学校の魅力をつなぎ、学びで身に付く力から進路・将来までを見通せる「魅力発信モデル」の構築を目指します。

【授業実践コース】

M2 笹本 涼介さん 国語科におけるマルチモーダルテキストを利用した小説の読みを深める授業実践

中学校国語科において、マルチモーダルテキスト（マンガ）を利用した小説の読みを深めるための授業を提案します。教材としてマンガを作成し、それぞれの描写同士を関連付け、妥当な解釈を行う深い読みを行う際の助けとしました。深い読みを行い、対話の土台となるような授業として位置づけをします。

文庫とマンガの読みの異同	文庫	マンガ
読者の視点	読者の視点から物語を読み解く。	読者の視点から物語を読み解く。また、マンガの視覚的要素（絵）も読み解く。
読者の感情	読者の感情を物語の展開に沿って読み解く。	読者の感情を物語の展開に沿って読み解く。また、マンガの視覚的要素（絵）も読み解く。
読者の思考	読者の思考を物語の展開に沿って読み解く。	読者の思考を物語の展開に沿って読み解く。また、マンガの視覚的要素（絵）も読み解く。



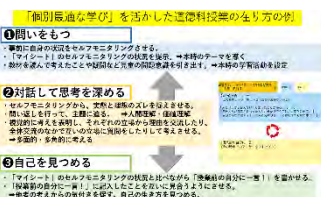
M2 時久祥香さん 中学校英語科における生徒のエンゲージメントを高める指導法の研究



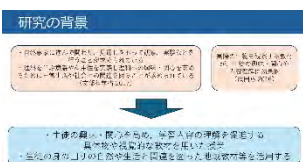
中学校英語科において、生徒のエンゲージメントを支える学習意欲を高めるため、ARCS モデルを活用した授業改善を行いました。授業後の生徒の声を基に、身近な場面設定や反復練習、選択できる活動を取り入れた結果、ARCS 平均得点は有意に上昇しました。今後さらに、質問紙、インタビュー、授業記録を照合し、個々の生徒の変化や有効な支援を検討していきます。

M2 和田萌花さん 「個別最適な学び」を活かした道徳科の授業づくり ―子供が問いを持ち、自己決定する学習を通して―

マイシート（道徳的価値に関わるセルフモニタリングと振り返りのシート）を活用し、問いを起点に対話して思考を深め、自己を見つめる道徳科授業を実践・検証しました。その結果、問いをもつ意識の向上が見られましたが、対話や自己を見つめる学びには課題が残りました。今後は、自己調整学習理論に基づく学習計画の設定や、単元的な実践を通して、個別最適な学びを活かした道徳科授業への改善を図ります。



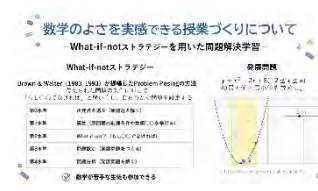
M1 岡林優晴さん 中学校理科における生物領域の教材開発 ―身近な生き物を教材として―



中学校理科の生物領域において、興味・関心や学習効果を高めるために、生徒が主体的に自然事象に関わることができる教材開発をすることを目的としました。身近なエビとカニを教材として授業を行い、興味・関心や知識・理解の深まり見取ることができました。今後は他領域でも教材開発を行う予定です。

M1 笹岡ゆりあさん 数学のよさを実感できる授業づくり ―What if not ストラテジーによる考え方のよさの得得―

高校数学における数学のよさを実感できる授業づくりについて研究しています。数学のよさの中の発展性に着目し、What-if-not ストラテジーを用いた問題づくりを通して、生徒が数学のよさを実感できる授業を行いました。今回は事前アンケート結果と1回目の実践について報告しました。



高知大学大学院教職実践高度化専攻（教職大学院）NEWSLETTER (No. 17)

M1 下司哲也さん 英語発信力伸長につなげるための生徒エンゲージメントを高める方略について

6 まで 9月以降の実践の方向性

生徒の「関わる」ことが出来る「距離」をもちに

〇振り返りシート「関係・実装・調整」
⇒生徒個人の認知的EGの促進を目指す

〇次年度に向け、生徒の振り返りをもとに学習方略を促すフィードバックを意識した介入方法を検討

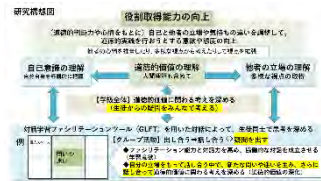
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿



生徒が主体的に学びを改善する力に着目し、学習者エンゲージメント（EG）を高める英語授業づくりを研究しています。振り返りと教師フィードバックを取り入れた授業モデルにより、認知的EGの向上と英語発信力の伸長との関連を探究します。今回は、仮説の背景と事前アンケートの結果を報告しました。

M1 藤本駿さん 道徳のための対話学習ファシリテーションツールの開発

役割取得能力の向上を目指し、対話学習ファシリテーションツール（以下、GLFT）を用いた道徳科授業の実践・検証を行いました。その結果、GLFTの活用場面や対話の深化に課題が見られました。今後は、GLFTの活用によって問題意識を高め、生徒同士で対話ができるように授業設計を見直していきます。



M1 馬淵功夢さん アダプテッドの視点を取り入れた体育科授業デザイン研究

体育科授業から見た「エコロジカルモデル」

〇エコロジカルモデルの不足
体育科授業特有の「環境要素」がどう関係しているのか十分に説明できない。

〇体育科授業の「構成要素」
①集団の雰囲気 ②半端の雰囲気 ③高い ④低い
⑤場の設定 ⑥教育など

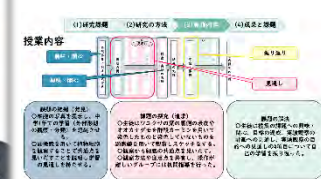
〇アダプテッドを取り入れた体育科授業実践から、アダプテッドの視点を明確にする。



多様な子どもが共に学ぶ体育科授業でのアダプテッドの視点を明らかにし、具体的な授業をデザインすることを目的とします。エコロジカルモデルでは不十分だった集団の関係性や学級の雰囲気等の要素を考慮し、アダプテッドを取り入れた授業実践の分析と考察を行います。

M1 森田祥吾さん 中学校理科における仮説検証プロセスの指導方略の研究 —仮説設定の過程に着目して—

生徒が、フロー図を使い思考を視覚化することで認知的負荷が軽減され、見通しをもって主体的に実験や考察に取り組めることが実践より示唆されました。今後は、質の高い仮説設定を行うために、思考ツールを活用したり、ワークシートを作成したりして、思考過程を可視化していく研究を進めていきます。



【特別支援教育コース】

M2 青山維さん 定時制に在籍する特別な支援を要する生徒に適した数学の教材開発

ブロックで度数分布表を視覚化

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿



数学の教材作成に当たって、生徒の強みと弱みを知るためにアセスメントを行いました。その結果、支援対象の生徒は、処理速度と視覚ワーキングメモリに強みをもっていることが明らかになりました。そのため、今後は、実際に触れて操作できる教材を開発し、複数回の小テストにより検証していく予定です。

M2 川田彩加さん 県立中学校における基礎的環境整備と合理的配慮の具体化

特別支援学級が設置されていない県立中学校で、集団への基礎的環境整備と個への合理的配慮の両輪による重層的支援を検証しています。実習者不在でも自走する体制づくりにむけて自立活動の視点を取り入れた支援シートで通常学級への汎化を目指します。




M2 高橋美里さん 知的障害特別支援学校における特別活動を要としたキャリア教育～ウェルビーイングの視点を生かしたキャリア・パスポートの有用性の検討～

(4) 実践の内容及方法

① 特別活動を要としたキャリア教育
・特別活動の活用
・キャリア教育の活用

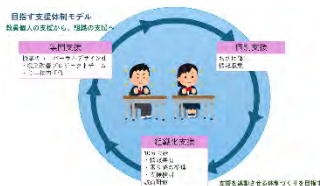
② 高等部でのゆめ☆みらいノートの活用
・ゆめ☆みらいノートの活用
・キャリア教育の活用

③ 様々な場面での振り返り活動の検証
・振り返り活動の活用
・キャリア教育の活用



知的障害特別支援学校における特別活動を要としたキャリア教育について研究しています。今年度は高等部を対象に、生徒が自らの学びを振り返り、成長を実感するためのツールとして、「ゆめ☆みらいノート」（キャリア・パスポート）の作成及び内容、活用方法等の検討を行っていきます。

M2 山岡ゆう子さん 特別支援教育の体制づくり ―効果的な支援方法―

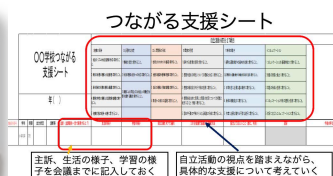


高校における特別支援教育の充実を目指し、組織化支援（10 分会議）、集団支援（授業改善）、個別支援（お助け部屋）を連動させた支援体制づくりを報告しました。支援の情報を循環させ、学校全体で生徒を支える仕組みの構築を検討しました。

M1 岡本彩さん 多様な児童が教室で安心して学習できる環境づくり

―複式学級のある小学校でのインクルーシブな授業の在り方と体制づくり―

生徒の学びを保障し、生徒全員が自ら学習方法を選択して学ぶことのできる自律した学習者となるよう、学び方を学ぶ授業を目指して授業実践を行いました。学び方の提案としてのオプションを提示し、自己調整学習を行うことで生徒がどう変容していくかを分析・検討していきます。



M1 岸本聡子さん 知的障害特別支援学校における卒業後を見据えた自立活動の実態把握及び指導内容の検討

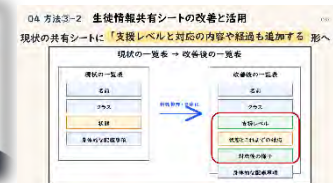


自立活動に関する指導の検討を行う共通認識として、その事柄を取り巻く環境やその行動が起こると考えられる背景を捉え、指導仮説を立てることを意識します。学級と授業担当を結ぶ10 分会議を活用して、自立活動の効果的な授業づくりに取り組んでいきます。

M1 島崎奈々さん 高等学校における予防的・開発的な校内支援体制づくりについて

―特別支援教育学校コーディネーターの視点から―

高等学校における特別支援教育、特に校内支援体制の充実を目指して、質問紙調査等を通じて現状と課題を把握し、基礎的環境整備を進めていきたいと考えています。UD 授業の取組や支援情報共有シートの改善を通して、すべての生徒が学びやすい組織的・予防的な校内支援体制の構築を目指していきます。



【各コース別・テーマ別協議内容】

【学校マネジメントコース】「教員が学べる組織」について、グループ別に協議を行いました。院生の事前調査をもとに、「具体的なルール、一般化された原理、価値観に基づくイメージの三層」で構成される実践知として共有し、公式の場だけでは捉えきれない文脈依存の学びに対し、職員室での談話など非公式の場が具体的な生徒や場面を通して学びを深める点が確認されました。また、学びを一回限りで終わらせず継続的に積み重ねること、公式と非公式の場が連続し互いを補完する組織づくりの重要性が共有されました。

【授業実践コース】「好きを育み、得意を伸ばす」視点を授業実践にどう生かすかを、学校種別に意見交流をしました。小学校では成功体験や承認、中学校では実物・地域教材や多様な学び、高校では教師が楽しむ姿勢の大切さについてそれぞれ示されました。講評では末永先生から、教育には子どもが自ら人生を選び実現するための可能性を広げる役割があり、そのためには、未知の世界や選択肢に出会うための知識が必要であり、「力強い知識」の意義が紹介されました。教師には、子どもの興味を大切にしつつ、多様な知識や経験との出会いをつくり、成長の「根」を養う役割が求められることを全体で確認しました。

【特別支援教育コース】グループ①では、校内支援体制に焦点を当て、短時間でも支援の方向性を整理する工夫（10 分会議）や自立活動の視点を取り入れた支援シートのあり方について話し合いが行われました。グループ②では、親育ての観点から、学校だけでなく、保護者も変わっていかねば、子どもは適切な支援を享受できないという話し合いが行われました。グループ③では、自立活動に着目し、教師がきちんと自立活動の視点を持った上で、教科や作業を実施していくことが重要であるという話し合いが行われました。

ご参会いただきました皆様、誠にありがとうございました。発表した院生にとって、これまでの学びや実践研究を振り返り、さらに深める貴重な機会となりました。皆様からいただいたご指摘やご意見を今後の教育実践や実践研究に生かし、さらなる学びにつなげられるよう、大学としても引き続き指導・支援に努めてまいります。

次回「第18回土佐の皿鉢ゼミ」は、2027年2月11日（木）の開催を予定しております。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

発行者：高知大学大学院教職実践高度化専攻長 野村幸代

編集者：教職実践高度化専攻総務係・ニュースレター委員

発行日：2026年9月1日

事務局：教職実践高度化専攻附属学校教育研究センター

〒780-8520 高知県高知市曙町2-5-1（教職大学院係）

TEL 088-844-8457 E-mail ks33@kochi-u.ac.jp